

第3回 「核なき未来」オピニオン U-20 の部 優秀賞作品

「核兵器を持つことは、善なのか、悪なのか」

小川 朋子

照らしつける太陽、雲一つない青く澄んだ空。二発の原子爆弾が日本に投下されてから79年。毎年夏が訪れるたび、私は太平洋戦争で命を落とした曾祖父を思い浮かべる。今私は問いかけたい。日本のリーダーへ。「唯一の被爆国日本がすべきことは『核の傘』の下に入る事なのか」と。そして「核抑止論」を推し進める人たちへ。持つことに意味のある核兵器は、使う可能性が本当に0であると言いきれぬのか。

夫を戦争によって失った曾祖母は、私に戦争の悲惨さ、残酷さを何度も教えてくれた。曾祖母の話聞くうちに「戦争」への学びを深める重要性を実感した私は、中学一年生の春、母と二人で広島平和資料館を訪れた。そこで目にした光景は、言語化に屈するほど残酷なものであった。同時に戦争放棄に対し、自分が何か行動を起こしていくべきだと使命感を感じ始めたのはこの頃であった。その後も、沖縄米軍基地、知覧特攻平和会館を訪れ、基地問題、特攻への理解を深めた。高校時には、核廃絶・核肯定、両者の意見を聞き入れた上で、より多くの若者が「戦争」について考えるきっかけを作りたいと考え、平和を願うオリジナルステッカーの作成・配布、「核問題」をテーマにしたゼミを開講した。核問題を客観的に捉え、中立的立場で行動を起こしてきた私であるが、核兵器の存在自体には反対を示している。原子爆弾が落とされた以上、日本はそれらを必要な過ちとして受け入れ、過去の過ちを無駄にすることのない行動を取るべきである。しかし現在、日本は核廃絶を目指す一方で、アメリカの核の傘の下で守られる、論理的に矛盾した行動を取り続けている。その状況の裏側にあるのは、「核兵器の保有はあくまでも自国を守るためであり、誰かを攻撃するものではない」といった「核抑止論」の考え方である。私は、「核抑止論」の持つ効果を理解した上で問いたい。本当に、目の前にある核兵器をこの先一生使う日が来ないと、自信を持って言えるのだろうか。核兵器の持つ「抑止力」を理由に核兵器を保有する国のリーダーは、被爆地に足を踏み入れ、当時の様子を目の前にしても、核兵器が平和的手段であると断言できるのだろうか。核兵器を作る以上、誤作動で被害を被る可能性も存在する。加えて、開発する場所にも危険が及ぶ。核兵器は存在自体、持つことから犠牲を生みかねないのである。核兵器を、使うことが目的で保持していないのであれば、そもそも持たなければ良いと、高校時に話を伺った核廃絶団体の職員は言葉にしていた。

一方、ウクライナ戦争は核兵器を放棄したことで起こったとも言われている。ウクライ

ナに住む日本人宣教師は、核抑止を現実的な観点から捉え、核兵器に対して肯定の立場を示していた。核兵器の保持により、今、このタイミングで平和が保たれていることは事実なのかもしれない。核兵器を持つべきなのか、否か。この問いの答えは、現時点では存在しない。それぞれの国、地域によって彼らの持つ「平和」への定義は異なる。だからこそ、それぞれの平和を守る手段も異なる。今ある国が核兵器を一斉に手放すことができれば、核兵器を廃絶した方が国益に繋がるという状況を生み出すことができれば、平和は創り出される。しかしそれがどれだけ難しいことなのか、国際社会の現実を見ることの重要性は、高校時に両者の意見を聞いたことで強く実感している。核兵器に対する考えは多種多様であり、それぞれが持つ意見に強い思い、背景が存在する。今の私たちにできることは、両者の意見に耳を傾け、それらを一つひとつ汲み取ること、そして最終的には独自の意見を持つことではないだろうか。目を背けることはしてはならない。難しい問題だからといって諦めることもしてはならない。大きな勇気で変化を遂げようとしなければ世界は何も変わらない。他国が核兵器を保持している限り、自国も破棄ができない。その考えを持っている限り核兵器のない世界は訪れない。日本が核の傘の下に存在する現状は、核抑止を肯定する行動として捉えられてもおかしくはない。核抑止の考えを打倒し、少しずつ世界を変えていく先頭に立つのは、核兵器の非人道性・悲惨さを実感した被爆国日本であるべきだと私は確信している。

先月、私の父は癌により命を落とした。自分の大切な人が目の前からいなくなることの虚しさ、何をしても父は戻ってこないという痛たまれなさ。核兵器を保有する限り、いつ、誰がこの気持ちを経験してもおかしくないということを、今を生きる全ての人には理解しているのだろうか。時間は有限である。核兵器の持つ威力とそれが使われる可能性への危機感を訴え、核の傘の下にいる現状に向き合い続けたい。そして私は全ての人に問いたい。「核兵器を保持することは善なのか、悪なのか」